

森林・里山と人間

～森林と人とのつながりを考える～

日時：平成28年2月26日（日） 13:30～16:00

講師：只木 良也（京都府立林業大学校長、名古屋大学名誉教授）

概況



1. 森林の成り立ちとそれがはぐくむ文化

日本には「あとは野となれ山となれ」という言葉があるが、これは日本らしい言葉であり、エジプトなどではこうした言葉は生まれない。日本の年間平均降水量は1700～1800mmであるが、こうした降水量が植生を決めており、乾燥から湿潤になるに従い砂漠、草原、サバンナ、森林へと変化していく。

日本の森林帯は、亜寒帯（常緑広葉樹林）、暖温帯（照葉樹林、落葉広葉樹林）、冷温帯（落葉広葉樹林）、亜寒帯（常緑針葉樹林）、寒帯（ハイマツ）に分けられ、それぞれ特徴的な樹種がみられる。国土の3分の2が森林であり、その40%が人工林である。

愛知県の森林は、暖温帯照葉樹林と中間温帯落葉樹林で構成されている。かつては焼き物の燃料として木材が利用されていたため、ハゲ山が広がっていた。現在では復旧されたが、手入れ不足やマツ枯れ、タケの侵入、カシナガの被害などの問題点がある。また、愛知は上流森林からの恵みを受けており、木曾川水系の水、木曾ヒノキなどの木材が利用されている。

2. 森林は1日にしてならず

「遷移」は植生が自然に移り変わっていく現象であり、生態系が完成されていく過程であるが、100～1000年単位で起こる「生態遷移」と、何千万・何億年単位で起こる「地質学的遷移」とがある。また、「遷移系列」とよばれる遷移の一定の順序があり、乾性遷移を例にみると、乾燥裸地→地衣・コケ→一年生草草原→多年生草草原→陽

性低木林→陽性高木林→陰性高木林 へと遷移する。「極相」は遷移系列の終着相であり、気候極相、土壌極相、地形極相、生物極相などがある。

また、農林業は遷移の抑制技術・短絡技術であり、造園・緑化産業は遷移を誘導・抑制するものである。

自然保護をする際には、遷移のことを考えなければならず、そっとしておくだけでは遷移が進んでいだけで、状態を維持することはできない。保存、保全、防護、修復、維持のうちどれを当てはめるのか、そして遷移の抑制も重要である。

3. うさぎ追いしかの山

里山は二次的自然であり、歴史的には外山あるいは戸山、端山をさす。農地と農村は里山に支えられ、落葉は有機肥料に、薪は燃料として使用したあと木灰(無機肥料)に、木材は住居・道具として利用するなど、里山の物質循環の中で人々は生活してきた。

しかしながら、化学肥料や石油燃料の普及などに伴い、里山の利用価値は次第に低下し、開発の対象となってしまった。

里山がなぜ必要なのかを環境保全機能論的(里山のたくさんの役割)、生態系論的(物質循環、生態系サービス)、文化論的に考え、これからの時代の利用法をみつけ、その利用法に応じた管理を行っていくことや、里山の社会資本としての位置づけ・都市施設としての位置づけをしていくことが重要である。